

中期ポルトガル語の動詞の語形に関する一考察¹—*Visão de Tündalo* と *Horto do Esposo* の場合—

水沼 修

1. はじめに

ポルトガル語の時代区分に関し、Leite de Vasconcellosが「*português arcaico*」と命名した時代は、初出文献が確認される時期から、16世紀のはじめ頃までとされる。1214年の*Testamento do Afonso II*と*Notícia de Torto*よりも前に書かれたとされるものを初出文献と考えるかどうかについては研究者の間で意見が分かれるが、この時代の終結時期については、Fernão de Oliveiraによるポルトガル語の文法書が初めて出版された1536年頃とされることが多い。Said Aliらは、Leite de Vasconcellos同様の区分を採用しているが、Lindley Cintraによる提案以降、この時代をさらに二分する考え方が今日では一般的となっている。このうちより古い時代については、「*português antigo*」(Cintra, cf. Castro 2004), 「*galego-português*」(Vázquez Cuesta 1971), 「*fase arcaica*」(Bechara 1991), より新しい時代については、「*português médio*」(Cintra, cf. Castro 2004), 「*português pré-clássico*」(Vázquez Cuesta 1971), 「*fase arcaica média*」(Bechara 1991)といった名称が提案されているが、ポルトガル語史研究においては、Lindley Cintraが提示した呼称(本稿ではそれぞれ「古ポルトガル語」, 「中期ポルトガル語」と呼ぶ)が採用されることが多いようである。

表 1 : ポルトガル語史の時代区分

時代	Leite de Vasconcelos	Lindley Cintra
～9世紀(882年)まで	<i>pré-histórico</i>	<i>pré-literário</i>
1200年(1214～1216)まで	<i>proto-histórico</i>	
1385年～1420年まで	<i>português arcaico</i>	<i>português antigo</i>
1536年～1550年まで		<i>português médio</i>
18世紀まで	<i>português moderno</i>	<i>português clássico</i>
19世紀～20世紀まで		<i>português moderno</i>

Castro (2004:73)

このようにして「*português arcaico*」を2つの時代に分けるのは、両者が異なる言語特徴を有すると考えられるからであり、「中期ポルトガル語」には、「古ポルトガル語」には見られない、現代語に類する特徴が確認されるからである。この中期ポルトガル語が始まる時期につい

¹ * 本研究は JSPS 科研費 23K00477 基盤研究©の助成を受けたものです。

ては、政治的、社会的に多大な影響をもたらしたとされるアルジュバロータの戦いがあった1385年から1420年ころとされることが多いが、これよりも早く、ポルトガルでの抒情詩全盛期の終焉の時期（1350年頃）と考える向きもある（Brocardo 2014）。

14世紀末までに見られたポルトガル語の音韻論的・形態論的特徴として、「母音間の子音の脱落により生じた母音接続」、「ラテン語の第三活用動詞から生じた直説法現在活用語尾 *-om*」、「動詞の語形 *-UNT* から生じた完了形語尾 *-on(-om)*」、「第二活用動詞の過去分詞 *-udo*」、「二人称複数語尾 *-d-*」、「*-or,-ol,-és,-nte* の語尾を有する名詞の通性使用」、「所有詞 *ma, ta, sa*」、「直説法現在及び接続法の一人称単数特有の語幹」、「舌先歯茎音摩擦音と前部舌面歯擦音の区別」、「*-l* の複数形における母音接続」などが、これまでの研究で指摘されてきており、これらがすなわち古ポルトガル語が有していた特徴であると言えることができるであろう（Bechara 1991, Matos e Silva 1994, 2004, Clarinda Maia 1995, Carvalho 1996）。

その後の15世紀前半から16世紀前半にポルトガル語に起こったとされる重要な変化として、「母音縮合に起因する母音接続の消失」、「*-ã,-õ,-ão*（母音接続）の *-ão*（二重鼻母音）への集約」、「第二活用動詞の過去分詞 *-udo* の消失」、「二人称複数語尾 *-d-* の脱落」、「*-or / -ora, -és / -esa* の定着」、「所有詞 *ma, ta, sa* の消失」、「舌先歯茎音摩擦音と前部舌面歯擦音の対立の消失」、「不規則動詞の規則化」、「*-l* の複数形における二重母音化」などが挙げられる。そして、これらは中期ポルトガル語を特徴づけるものであると同時に、現代ポルトガル語が持つ特色に大きく近づくことになる変化でもあったと言える。

本稿では、古ポルトガル語から中期ポルトガル語への移行期とも考えられる時期に作成されたとされるポルトガル語の作品2点を調査し、上述の諸変化の動詞の語形に関わるものの中から、三人称複数語尾の鼻母音の表記、二人称複数語尾の *-d-* の有無、過去分詞 *-udo* の使用に関し、どのような様相を呈していたかについて考察を行う。

2. 調査対象

2.1. *Visão do Túndalo*

*Visão de Túndalo*は1149年にアイルランド出身のMarcusなる人物によってドイツで書かれたとされる作品に起源を持つ。このラテン語のテキストはその後様々な言語に翻訳されたが、およそ1世紀後にはVincent de Beauvaisによる*Speculum Historiale*に採用されることとなった。13世紀以降、このVincent de Beauvaisのヴァージョンも多言語に翻訳されていき、現在まで、ポルトガル語版をはじめ、スペイン語版、フランス語版、イタリア語版、ドイツ語版、オランダ語版、スウェーデン語版などに引き継がれている。

ポルトガル語版については、アルコバサ修道院*Mosteiro de Alcobaça*に伝わった写本が2点あり、それらはALC_211（ポルトガル国立図書館）、ALC_462（ポルトガル国立図書館）と呼ばれている²。ALC_211は全部で104枚から成り、このうちfols. 90v-104vが*Visão de Túndalo*に該当

² Esteves Pereira（1895）と Nunes（1905）では、ALC_211がcodice 244、ALC_462がcodice 266

し、これ以外にも、*o Catecismo da Doutrina Cristão*, *o Virgeu de Consolaçom*, *Tractado das meditações de Sã Bernardo*も収録されている。ALC_462は全部で171枚から成り、このうち fols. 124r-137rが*Visão de Tündalo*に該当し、これ以外にも、*Colecção Mystica de Fr. Hylario de Lourinhã*, *Monge Cisterciete de Alcobaça*が含まれる。

2つの写本は、それぞれ別のテキストを受け継いでいると考えられているが、両者とも15世紀に作成されたと見られている。この点に関し、Esteves Pereira (1895) は、写本に見られる言語は13世紀より前のものでもなく、15世紀より後のものでもないとし、両写本が作られたのは14世紀の終わり、または、15世紀のはじめではないかと推測している。またNunes (1905) は、使用されている言語に関し、ALC_462よりもALC_211のほうが古い特徴を持つ可能性があると指摘している。

1895年にEsteves Pereiraが*Revista Lusitana*においてALC_211のエディションを発表し、1903年にJoaquim Nunesが同じく*Revista Lusitana*においてALC_462のエディションを発表している。また、ALC_462については、これとは別のエディションが1985年に出版された*Vidas de Santos de um Manuscrito Alcobacense* (Castro 1985) に収録されている。本調査で引用されている例文は、それぞれEsteves Pereira (1895) とNunes (1905) のものである。

2.2. *Horto do Esposo*³

*Horto do Esposo*は、中世の宗教的・道徳的規範を説いた作品で、14世紀終わりまたは15世紀はじめに作られたと考えられている⁴。内容的には、ラテン語で書かれた他の作品からの引用が大部分を占めており、それらは、宗教、哲学、歴史、自然科学など多岐の分野に渡る。しかしながら、同時代の他の多くの文学作品とは異なり、他言語からの翻訳ではなく、ポルトガル語で書かれたオリジナルの作品と推測されている。なお、今のところ作者について詳しいことはわかっていない⁵。

現存する写本は3点で、それらは、写本A (Alc.198) , 写本B (Alc.212) , 写本C (fragmentos 1,2,3) ⁶であり、いずれも15世紀に作成されたと考えられている。写本Aと写本Bには *Horto do Esposo* 以外の作品も含まれるが、両写本において当該作品の筆記を担当した写字生はそれぞれ一人ずつだったと考えられている⁷。また、それぞれの写本が作成された時期はあまり離れてい

と呼ばれている。

³ 作品についての説明および調査結果は、水沼 (2018) (2023) より一部再掲した。

⁴ Maler (1964) は 1380 年～90 年に作成されたと推測している。

⁵ Serafim da Silva Neto, Artur Anselmo らによって、他言語からの翻訳であると考えられていたが、Mário Martins によってこの説が否定され、オリジナルがポルトガル語で書かれたとする味が広く受け入れられている (Martins 1948, Fererro e Azevedo 1993: 316)

⁶ 1997 年から 1998 年にかけて発見された断片的資料でいずれも同一の写本に属するとされる。

⁷ 写本 A の fols.1r-155r, 写本 B の fols.81v-251v がそれぞれ *Horto do Esposo* に該当する。写本 B については、fol.153v-154r において、さらに別の写字生が関わっている可能性が指摘されている。(Modena 2016:XXVI)

ないため対応する言語状態は非常に似通ってはいるが、各写本の間には幾つかの異同も観察される。写本A及び写本Bはいずれもアルコバサ修道院 *Mosteiro de Alcobaça* に伝わったものであるが、Maler (1964) やModena (2016) によれば、いずれもオリジナルではなく、また、一方からもう一方に直接写されてもいない。写本Cはロルヴァン修道院 *Mosteiro de Lorvão* に伝わったもので、Aから写されたものでもなく、Bから写されたものでもないことが指摘されている (Modena 2016:XLII-XLIII)。これらのことから、以下のような *stemma codicum* が想定されている。



図1：推定される *Horto do Esposo* の *stemma codicum* (Modena 2016:XLIV)

同作品で使用されている言語について、Maler (1964) は、古ポルトガル語の全ての特徴を有していると述べている。

1956年にBertil Malerが同作品のエディションを出版した。その後、2007年に、Irene Freire Nunes によるエディションが出版され、2016年には、Martine Modena による電子エディションが公開されている。本調査で引用されている例文は Modena (2016) のものである。

Visão de Túndalo と *Horto do Esposo* に共通する点として、いずれも現存する写本がアルコバサ修道院に伝わったこと (*Horto do Esposo* の写本Cを除く)、15世紀に作成されたと推測されていることが挙げられる。そこから、ほぼ同時代に作成されたと考えられる写本において、使用されている言語にどのような違いが見られるかに注目する。また、それぞれの作品には複数の写本が存在するが、作成時期のずれが、写本の間で見られる異同にどのように関係しているのかについても注目する。

作品の性格の違いとしては、前者が翻訳であるのに対し、後者がポルトガル語で書かれている点が挙げられる。また分量にも大きな違いがあるため、分析においての生起例の数も異なる。

3. 三人称複数語尾の鼻母音

俗ラテン語からの変化の過程において、ポルトガル語に起きた重要な変化の一つに母音間の *-n-* の脱落が挙げられる (MANU- > /mãno/ > /mão/)。

-n- に先行する母音の鼻母音化、それに続く *-n-* の脱落は、9世紀以降、ガリシア・ポルトガル語が話されていた地域で徐々に広まっていったと考えられている (Brocardo 2014)。

古ポルトガル語の時代には、この鼻子音の脱落によって生じた3種類の語尾が存在していた

とされる。それらは、-ANE（名詞）、-ANT（動詞）に由来する -ã, -ONE / -ŪDINE（名詞）、-UNT / -UM（動詞）に由来する -õ, -ĀNU / -ĀNU（名詞）に由来する -ão である。

(1) Mays outros criminosus quaes quer que **son** acusados dalguus maaos feytos e **foron** uençudos por tetigoos ou por **confissõ** que **façan**⁸

(*Flores de Direito*, 13世紀末)

(2) Outros **tijnhã** que porque os mouros **som** grandes estrologos que **faziã** parecêça de fantasmas d'omees de caualo. E **nõ erã** tantos como parecia.

(*Livro de Linhagens do Conde D. Pedro*, 14世紀末)

動詞の語形（三人称複数語尾）に限ると以下のとおりである。

(3) **-ã** < **-AN(T)** : *ser*の直説法現在及び直説法完了過去⁹以外（例：*façan, tijnhã, erã, faziã*）

(4) **-õ** < **-UM(T)** : 直説法完了過去（例：*foron*）, および, *ser*の直説法現在（例：*son*）

しかし14世紀以降、語源的ではない表記が散見されるようになり、15世紀には以下の例のように表記の揺れは顕著になっていく。

(5) **Errom** per sobejo sentido contra Deos, quano per sanha del **renegom** ou mal **falom**, dizendo que nom e todo poderoso, nem faz totalas cousas dereitas.

(*Leal Conselheiro de Dom Duarte*, 1435-1438)

その後、単鼻母音であった -ã と -õ, および母音接続の -ão（二音節）は、二重鼻母音化されて単音節の -ão へと変化を遂げた。この変化のプロセスについては研究者の間で意見が分かれるようで、この点に関し Sampson (1999:195) は「13世紀のポルトガル語が有していた語末母音 [-ã], [-õ], [-ão] が [ẽw] へと統合された過程の詳細、そしてその確たる要因は、依然として不明確であり議論の余地がある」としている。

いずれにせよ、上記例文に見られるような表記の揺れを、二重母音化を示すものとして捉える向きが多い。

*Visão de Tündalo*で確認された、-ã または -õ を含む動詞の語形は以下の通りである。

表2：-ãまたは-õを含む動詞の語形（*Visão de Tündalo*）

	直説法 現在	直説法 完了過去	直説法 未完了過去	直説法 未来	接続法 現在	条件法	計

⁸ (1) ~ (5) の例文は Brocardo (2014:121)より。

⁹ 本論では pretérito perfeito を完了過去, pretérito imperfeito を未完了過去とする。

ALC_211	57	125	245	8	9	4	448
ALC_462	43	95	178	34	9	2	361

ALC_211では448例、ALC_462では361例確認できたが、生起例の総数以外にも両者には違いが見られる。ALC_211で確認できた448例は、全て語源的と判断できたのに対し、ALC_462では、表記の揺れが確認できる。

表3：ALC_462における表記の揺れ1 (*Visão de Tundalo*)

	直説法現在 ¹⁰	直説法 未完了過去	直説法 未来	接続法現在	条件法
-ã	21	160	33	9	2
-õ	1	18	1	0	0

例えば直説法未完了過去は、語源的には -ã を伴い、そのように表記されている場合がほとんど (160例) であるが、-õ を伴うものも18例確認できる。同様の例は、直説法現在のものと直説法未来のものも1例ずつある。これらのうち、cantavõ (3例)、chamavõ (1例)、chegavõ (1例)、conhecerõ (1例)、filhavõ (1例)、lazeravõ (1例)、levãtavõ (1例)、sopravõ (1例) については、語源的ではない表記のみが確認されるのに対し、次のものについては、-ãでの生起例と-õでの生起例が両方確認できる。

(6) *alçavã* (1例) /*alçavõ* (1例)、*davã* (8例) /*davõ* (1例)、*deitavã* (1例) /*deitavõ* (1例)、*estavã* (16例) /*estavõ* (3例)、*esperam* (1例) /*esperõ* (1例)、*queimavan* (1例) /*queymavõ* (1例)、*tomavã* (3例) /*tomavõ* (1例)

また、語源的には -õ を伴う、直説法完了過去や、*ser* の直説法現在で、-ã で表記されている例が1例ずつ確認される (*ouyvrã*, *sam*)。しかし、いずれの場合でも、語源的な表記が選択される場合が圧倒的に多い。

表4：ALC_462における表記の揺れ2 (*Visão de Tundalo*)

	直説法現在 (SER)	直説法完了過去
-ã	1	1
-õ	20	124

¹⁰ *ser* の直説法現在を除く。

Mattos e Silva (1991) は、*Cancioneiro Geral de Garcia de Rezende*において *-ã* と *-õ* と *-ão* が同じ韻として現れている詩が数多く見られることから、15世紀の後半にはこれらはすでに二重母音に集結していたと考えている。ALC_211では写字生にその傾向はまだ見られないものの、ALC_462においては、その兆候が現れているとも見ることができる¹¹。

これに対し、*Horto do Esposo*では、まず写本Aで、直説法完了過去の297の用例のうち、語源的(*-õ*)であるのが189例で、語源的でない(*-ã*)のが108例確認できる。同様に、写本Bでは、全302例のうち、*-õ* の表記が161例で、*-ã* の表記が141例ある。

表5：直説法完了過去の表記 (*Horto do Esposo*)

	<i>-ã</i>	<i>-õ</i>	
写本A	108 (36.4%)	189 (63.6%)	297
写本B	141 (46.7%)	161 (53.3%)	302
	147	352	599

両写本を比較すると、写本Aがより保守的な傾向を示すと見ることもできるだろう。写本間の異同に関し、例えば、*andarõ*, *lançarõ*, *matarõ*などについては、写本Bでは *-ã* で表記されている例は確認できない。また、*forõ* (*ser* および *ir*) は、用例の総数も多いが、どちらの写本においても *-ã* で表記される割合が最も高い。

(7) *andaram* p(er) carrey(ra) streyta e asp(er)a p(er) q(ue) podese[m] trespasssar aos ceos (A: fol.87v)

(8) *andarõ* p(er) carreyra est(re)yta e asp(er)a p(er) q(ue) podesse[m] t(re)spassar aos ceos (B: fol.175r)

(9) Estas tres batalhas *forã* feytas ã t(re)s ânos en q(ue) *forã* mort(os) tantos do reyno de P(er)sya do q(ua)l ante de poucos ânos *forã* morto (A: fol.97v)

(10) Assy como *forã* Sam Giraldo e Sam Medardo q(ue) anbos *forã* imaãos d'huũ vëtre e anbos nacerã ã huũ dia e em huũ dia *forã* anbos cõsegrados (B: fol.217r)

一方、語源的には *-ã* で表記されるべき箇所において、*-õ* が現れる例については、写本Aでは90例、写本Bでは263例確認される。用例の数の違いだけでなく、写本Aに比べ写本Bでは特に、*chamã* (*chamar* の直説法現在)、*estavã* (*estar* の直説法未完了過去)などの語形が *-õ* で表記されている例が多く見られるという写本の間での異同も確認される。

¹¹ これらの鼻母音を含む名詞については、いずれの写本においても、語源的ではない表記は確認できなかった。

(11) falando de Philipe, rey de França, q(ue) regnou ãno ano da Ëcarnação de mil e cento e satêta e nove anos ãno t(er)rentorio q(ue) **chamõ** Senonico, em huũ loguar q(ue) **chamõ** Chudo (B: fol.248v)

(12) hũa molher q(ue) fora sua amygua q(ua)ndo era mancebo foy aa oferta com as outras q(ue) hi **estavõ**. (B: fol.229r)

*Horto do Esposo*における鼻母音の表記に関し、写本Aと写本Bのいずれも、*Visão de Tündalo*で見られた傾向とは様相を異にしているのが確認できる。

4. 二人称複数語尾の *-d-*

ラテン語の *-t-* が有声化され生じた、ポルトガル語の動詞の二人称複数語尾 *-des-* は、中期ポルトガル語にかけての時期における母音間の *-d-* の消失に伴い、それぞれ *-ades > -aes > -ais ; -edes > -ees > -es / -eis ; -ides > -iis > -is* となった (Cardeira 2005)。

二人称複数語尾の *-d-* が消失した形は、13世紀の写本でも少数ではあるがすでに見られることがわかっている (Carvalho 1996, Cardeira 2005)。その後、15世紀を通して消失のプロセスが広がっていき、16世紀の半ばには *-d-* の脱落が定着したと考えられている。

具体的な時期に関し、例えば Leite de Vasconcellos (1911:186) は、15世紀の第1四半世紀には、文学言語においては、この *-d-* を保った形は消失した形にとってかわられたと考えている。また、Williams (1986:155.3) は、この *-d-* の消失は1418年～1434年の間に起こったと述べている。Cardeira (2005) の調査では1410年～1430年の間に *-d-* が消失した形の割合が *-d-* を保った形の割合を上回るのが確認されている。

したがって、古ポルトガル語の時代には二人称複数語尾の *-d-* が保たれるのが一般的だったのに対し、中期ポルトガル語の時代では、この *-d-* が脱落した形が徐々に広まり、それが現代ポルトガル語の特徴に受け継がれたと見ることが出来る。

Visão de Tündalo では、ALC_211においても ALC_462においても、二人称複数語尾に *-d-* が脱落した形は確認できなかった。

(13) **Vynde** beentos do meu padre. e **recebede** o reyno que uos sta aparelhado do começo do mundo.

(ALC_211)

(14) E **sabede** que el fora seu senho deles todos no mundo. (ALC_211)

(15) E aquelles diaboos diziam hũus aos outros no avoada ainda esto. e os outros dziã. **deitade** as cá a nos. e elles deitavõlhas (ALC-462)

(16) Ay minha esperança e meu bem que graças vos posso eu dar por canto bem me **avedes** fecto

(ALC-462)

三人称複数語尾の鼻母音の表記では写本間での違いが見られたが、二人称複数語尾についてはそのような違いは見られない。同じ傾向は *Horto do Esposo* でも見ることができる。いずれの写本でも、*-d-* が落ちている形は確認することができない。

(17) q(ue) sodes semelhantes a Deus ãna mente, tomades afeytamêtos das cousas bayxas da natura excelente (A: fol.142v)

(18) ca huũ he abbade e outro b(is)po e out(r)o arceb(is)po e uos ficades assy en tam g(ra)nde pop(re)za. (B: fol.108r)

(19) ... filhos obedececede a uossos padres enno senhor deus (C)

Cardeira (2005) は書簡などの王室文書においては、1425 年ごろを境に *-d-* が消失した形が使用される割合が急激に増える傾向にあると述べている。その一方、文学テキストでは写字生がオリジナルを忠実に書き写す傾向が見られることから、テキスト全体を通して革新的な傾向が見られないのではないかと指摘している。15 世紀の写本とされる *Demanda do Santo Graal* においても、同様の動向が確認できるとし、これも、写字生の保守性と関連付けている¹²。また、Carvalho (1996) も、15 世紀に作成されたいくつかの写本や初期の印刷本 (*Crónica da Ordem dos Frades Menores, Boosco Deleitoso, Livro da Vita Christi, História de Vespasiano* など) において、*-d-* の消失がほとんど見られないとしている。

以上のことを踏まえると、二人称複数語尾の表記に関し、*Visão de Túndalo* および *Horto do Esposo* においても、同時代または前後する時代の他の文学作品と類似の傾向が見られると考えられるかもしれない。

5. 過去分詞 *-udo-*

ラテン語の第二変化動詞 (*-ĒRE*) および第三変化動詞 (*-ĪRE*) は、ポルトガル語を始めとしたイベリア半島のロマンス語では、第二変化動詞 (*-er*) に集約された。当初、この新しい第二変化動詞の過去分詞は *-udo / a(s)* を語尾にもつ形であり、*-ido / a(s)* は、ラテン語の第四変化動詞 (*-ĪRE*) に由来する動詞 (*-ir*) の過去分詞に限定されていた。この *-udo* の形は、13 世紀～14 世紀のポルトガル語では一般的で、古ポルトガル語を代表する特徴の一つにしばしば挙げられる。

しかし、15 世紀に入ると、第二変化動詞の過去分詞としてだけでなく、名詞や形容詞などのカテゴリーにおいても *-ido* が使用されるほうが多くなっていき、*-udo* の形が見られなくなるのが中期ポルトガル語の特徴であるとされる。(Williams 1975 : 159, Teyssier 1982 : 32-33, Maia 1986 : 749-750, Cardeira 2005 : 203-219) .

Visão de Túndalo では、ALC_211 において、*-udo* の形が 5 例、*-ido* の形が 1 例、ALC-462 において、*-udo* の形が 1 例、*-ido* の形が 1 例確認される。

¹² Castro (1996) は、*A Demanda do Santo Graal* の言語特徴について、翻訳が行われた時代 (13 世紀半ば) の特徴と、写本が作成された時代 (15 世紀半ば) の特徴が共存すると指摘している。

(20) e depois que feruiam. deitauanse per ella a fundo. assi como a cera **derretuda** polo panno.

(ALC_211)

(21) A alma depois que foy **metuda** en aquela casa. e passadas ia todas as penas. que en a sobredicta casa eram **conteudas**. por muyto mal que auia fecto e **merecido**. (ALC_211)

(22) E aquel lucifer iazia **escondudo** en huun jeito de ferro. (ALC_211)

(23) Mais a alma que tanta coita e tanta pressa e amargura ouuera **sofruda** e passada. (ALC_211)

(24) E depois que eram **derretudas** coavãnas ali como coam a cera. (ALC-462)

(25) E des que erã **derretidas** tornavãsse como dantes eram. (ALC-462)

生起数が少ないとはいえ、ALC_211 では *-udo* の形が *-ido* に対して優勢となっている。興味深いことには、ALC_462 で確認される 2 例は同じ過去分詞 (*derretudas* / *derretidas*) のものである。

Horto do Esposo では、*-udo* は、写本 A が 69 例、写本 B が 65 例確認される。これらのうち、58 箇所については、両方の写本で過去分詞 *-udo* が一致して用いられている。しかし、写本 A と写本 B の間で揺れが見られる過去分詞も複数ある。

表 6：写本 A と写本 B における *-ido* / *-udo* (*Horto do Esposo*)

	A		B	
	<i>-ido</i>	<i>-udo</i>	<i>-ido</i>	<i>-udo</i>
<i>absorver</i>	1	3	0	1
<i>conceber</i>	9	0	7	1
<i>confundir</i>	4	1	2	0
<i>converter</i>	2	1	0	0
<i>derreter</i>	3	2	2	1
<i>dever</i>	2	4	1	3
<i>entender</i>	1	2	1	2
<i>esconder</i>	18	1	19	1
<i>meter</i>	4	2	3	1
<i>saber</i>	2	6	1	4
<i>vencer</i>	9	4	14	1

表 6 を見る限り、*saber* や *dever* など一部の動詞を除くと、両写本においても、写字生は *-ido* の形を好む傾向にあったと推測することができそうである。テキスト全体を見ると、*-udo* の形

が数多く確認されるものの、写字生が-idoを用いることに抵抗があったようには見受けられない。

これに対し、*Visão de Tündalo* においては、-ido の例はそれぞれの写本で1例ずつしか確認されない。この点に関しては、過去分詞そのものの生起数が少ないこともあり、写字生の傾向を推測するのは容易ではないように思われる。

6. その他

ここまで、冒頭で言及した3つの項目に関し、*Visão de Tündalo* と *Horto do Esposo* におけるポルトガル語がどのような様相を呈していたのかを見てきた。これらに加えて、最後に、動詞の語形に関わる問題の一つとして、*ter / haver* + 過去分詞の形式を取り上げる。

現代ロマンス諸語の多くは、ラテン語の HABERE に起源を持つ動詞を助動詞とする複合時制形式を有するが、初期のポルトガル語においても、*haver* (<HABERE) が過去分詞を伴う形式が一般的であった。この形式に *ter* (<TENERE) が参入し、両者の交替が徐々に進められた結果、現代語では、文語的な使用（主に直説法過去完了）を除いて、*ter* を助動詞に用いる複合時制形式が定着した。

この形式における *haver* と *ter* の交替の時期については、研究者の間で意見は分かれるが、概ね15世紀から17世紀の間に位置づけられることが多い (Osório 2004)。表7及び表8は、いずれも中世ポルトガル語電子化コーパス (*Corpus Informatizado do Português Medieval*) を用いた調査であるが、古ポルトガル語の時代である14世紀においては *haver* の形式が一般的であったのに対し、中期ポルトガル語の時代が始まる15世紀以降 *ter* の形式が優勢になっていく様子が見えてくる。

表7: *haver / ter* + 過去分詞の分布 (Osório 2008)

	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
<i>haver</i> + 過去分詞	92,90%	88,20%	45,50%	31,10%
<i>ter</i> + 過去分詞	7,10%	11,80%	55,50%	68,90%

表8: *haver / ter* + 過去分詞の分布 (水沼 2006) ¹³

作品	14世紀				15世紀				
	<i>PP</i>	<i>CAXL</i>	<i>CAXP</i>	<i>CGE</i>	<i>LC</i>	<i>LEBC</i>	<i>OE</i>	<i>CP</i>	<i>ZPM</i>
<i>haver</i>	379	11	14	949	27	12	52	17	10
<i>ter</i>	21	6	13	50	42	29	27	9	112
計	400	17	27	999	69	41	79	26	122

¹³ *PP* – *Afonso X, Primeyra Partida (1350?)*, *CAXL* – *Crónica de Afonso X (Ms L) in Crónica Geral de Espanha de 1344*, *CAXP* – *Crónica de Afonso X (Ms P) in Crónica Geral de Espanha de 1344*, *CGE* – *Crónica Geral de Espanha de 1344*, *LC* – *Leal Conselheiro (1433/1438?)*, *LEBC* – *Livro da Ensinança de Bem Cavalgar Toda Sela (1437/1438?)*, *OE* – *Orto do Esposo*, *CP* – *Castelo Perigoso*, *ZPM* – *Crónica do Conde D. Pedro de Meneses*

表 8 は 14 世紀と 15 世紀の文学テキストにおける *haver* と *ter* の分布を示したものである。*Horto do Esposo* (表中の *OE*) では、15 世紀の他のテキストと比べると *haver* の割合が高く、表中の 14 世紀のテキストで見られる分布に近いものになっている。

一方、この形式における過去分詞と直接目的語の性数一致が見られなくなるプロセスは、ポルトガル語においては 16 世紀後半から 17 世紀前半にかけて加速したと考えられている (Bechara 1985:64)。

表 9 : 15 世紀における性数一致の有無 (*Corpus Informatizado do Português Medieval*)

	<i>DSG</i>	<i>LC</i>	<i>LEBC</i>	<i>OE</i>	<i>CP</i>	<i>ZPM</i>
一致あり	90	24	17	47	15	60
一致なし	7	2	1	2	0	7

表 9 は、上述のコーパスにおける 15 世紀の文学テキストを対象に、この形式における性数一致の有無を調査したものである。いずれのテキストにおいても、直接目的語の性と数に過去分詞が一致している例が多数を占める。*Horto do Esposo* においては一致ありが 47 例、一致なしが 2 例となっている。

Visão de Túndalo について見ていくと、まず、ALC_211 では、*haver* が過去分詞を伴う形式が 11 例、*ter* が過去分詞を伴う形式が 1 例確認される。これら 12 例全てにおいて、過去分詞と直接目的語の間で性と数の一致が見られる。

(26) E a alma hia muy quebrantada dos trabalhos que **auia** passados. (ALC_211)

(27) o ben que deus **ten** aparelhado (ALC_211)

ALC_462 では、*haver* の形式が 12 例、*ter* の形式が 2 例確認される。このうち *haver* の 2 例において、過去分詞の性数変化が確認できない (30) (31)。

(28) E diz que daly donde estavã vija a gloria daquelles per onde passara. e vija as penas que **avia** leixadas. (ALC_462)

(29) nos dê aquelles b~ees perduravees que **tem** guardados para os amigos. (ALC_462)

(30) E entom começou de andar avante per muy piores logares que ante **avia andado** (ALC_462)

(31) E desy foram adiante. e virõ h~uu muro que era muy desasemelhado dos outros que **avia visto** ~e alteza e em fremosura e em claridade (ALC_462)

この時代の文学テキストの傾向と比べると、*Visão de Tündalo* で見られる、この形式における *haver* と *ter* の分布は、13 世紀や 14 世紀のそれと似通っていると考えられる。性数の一致が見られなくなるプロセスについては、中期ポルトガル語の時代を通じて緩やかに進行していったと見られており、本調査で対象となっているテキスト、およびこれらと同年代の作品においては、一致しない例はまだそれほど多く確認できない。

7. まとめ

まずはじめに三人称複数語尾の表記の揺れについては、*Visão de Tündalo* に比べ *Horto do Esposo* においてより顕著であることがわかった。特に前者に関しては、ALC_211 において語源的ではない表記が確認されない一方、ALC_462 においては直説法未完了過去などにおいてこのような例が複数確認されるなど、写本間に大きな違いが見られる。

二人称複数語尾に関しては、いずれの作品のいずれの写本においても、*-d-* を伴わない例は確認できなかった。これまでの研究は、*-d-* の消失のプロセスが 15 世紀前半には一定程度進行していることを示唆するものが多いが、文学テキストにおいてこの変化が表記に現れ出すのはもう少しあとになってからだと考えられるだろう。

両作品において、過去分詞 *-udo* が使用されている例は確認できるが、後にこれに取って代わる *-ido* が用いられている例は *Horto do Esposo* で多く見られる。

過去分詞を伴う形式における *haver* と *ter* の選択に関し、両作品で見られる傾向は 14 世紀のそれに近い。また、両作品ともに、同時代の作品で見られる傾向と同様に、この形式における性数の一致は概ね保たれている。

Visão de Tündalo の 2 つの写本に関し、ALC_211 で使用されている言語と ALC_462 において使用されている言語を比べると、三人称複数語尾の語源的な表記や *haver* が過去分詞を伴う形式における性数一致の保持などを考慮すると、前者においてより保守的な傾向が見られると考えることもでき、これは、先の Nunes (1905) の記述とも合致する。これと比べると、*Horto do Esposo* の写本間に見られる特色の違いはそれほど大きいとは言えないかもしれない。

本稿では、先に挙げた、中期ポルトガル語を特徴づける諸変化のうち、動詞の語形に関わる項目を取り上げた。扱った 3 つの項目に関しては、異なるペースで変化が進行していったと推測できる。また、本調査においては、他言語からの翻訳のテキストに見られる特徴と、はじめからポルトガル語で書かれたテキストに見られる特徴を明確に区別する指標は発見できなかった。これらの点を十分考慮し、動詞の語形以外に関しても調査を進めていくことで、両作品で使用されている言語だけでなく、この移行期のポルトガル語についての知見を深められることを期待する。

参考文献

Bechara, Evanildo. (1991). "As fases da língua portuguesa escrita". In Dieter Kremer (ed.), *Actes du XVIIIe Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes*, III. Tübingen: Max Niemeyer,

- pp. 68-76.
- Brocardo, Maria Teresa. (2014). *Tópicos de História da Língua Portuguesa*. Lisboa: Colibri.
- Cardeira, Esperança. (2005). *Entre o Português Antigo e o Português Clássico*. Lisboa: INCM.
- Carvalho, Maria José. (1996). *Do português arcaico ao moderno: contributos para uma nova proposta de periodização* (Dissertação de Mestrado). Coimbra: Faculdade de Letras da Universidade de Coimbra.
- Castro, Ivo. (1985). “Vidas de Santos de um Manuscrito Alcobacense (Coleção Mística de Fr. Hilário da Lourinhã, COD. ALC. CCLXVI/ANTT 2274)”, *Revista Lusitana*, Nova Série, Sep.nº.4 e 5. Lisboa: Instituto Nacional de Investigação Científica - Centro de Estudos Geográficos.
- (1993). “Demanda do Santo Graal”. In Giulia Lanciani & Giuseppe Tavani (org.), *Dicionário da Literatura Medieval Galega e Portuguesa*. Lisboa: Caminho, pp. 203-206.
- (2004). *Introdução à História do Português*. Lisboa: Colibri.
- Esteves Pereira, Francisco Maria. (1895). “Visão de Túndalo”, *Revista Lusitana*, III, pp. 97-120.
- Ferrero, A. Diaz e Peixeiro, H. Augusto. (1993). “Horto do Esposo”. In Giulia Lanciani & Giuseppe Tavani (org.), *Dicionário da Literatura Medieval Galega e Portuguesa*. Lisboa: Caminho, pp. 315-316.
- Maia, Clarinda de Azevedo. (1995). “Sociolinguística histórica e periodização linguística. Algumas reflexões sobre a diferença entre português arcaico e português moderno”, *Diacrítica*, 10. Braga: Centro de Estudos Portugueses Universidade do Minho, pp.3-30.
- Maler, Bertil. (1956). *Orto do Esposo. Texto inédito do fim do século XIV ou começo do XV. Edição crítica com introdução, anotações e glossário*. Vol. I. Texto Crítico. Rio de Janeiro: Instituto Nacional do Livro.
- (1956). *Orto do Esposo. Texto inédito do fim do século XIV ou começo do XV. Edição crítica com introdução, anotações e glossário*. Vol. II. Comentário. Rio de Janeiro: Instituto Nacional do Livro.
- (1964). *Orto do Esposo*. Vol. III. Correções dos vols. I e II, estudo das fontes e do estudo da língua, glossário, lista dos livros citados e índice geral. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Martins, Ana Maria e Carrilho, Ernestina (eds.). (2016). *Manual de linguística portuguesa* (Series Manuals of Romance Linguistics, 16). Berlin / Boston: De Gruyter Mouton.
- Martins, Mário. (1948). “À volta do Orto do Esposo”, *Brotéria*, XLVI, pp.164-176.
- Mattos e Silva, Rosa Virgínia. (1994). “Para uma caracterização do período arcaico do português”, *D.E.L.T.A.*, 10 (no. Especial), pp. 247-276.
- (2004). “Novos indicadores para os limites do português arcaico”, *ABRALIN*, v.3, n.1/2, pp. 259-268.
- Modena, Martina. (2016). *Horto do Esposo*. Edizione critica elettronica (Tesi di Dottorato). Venezia: Università Ca'Foscari - Scuola Dottorale di Ateneo.
- Nunes, Irene Freire (ed.). (2007). *Horto do Esposo*. Lisboa: Colibri.
- Nunes, José Joaquim. (1905). “Textos antigos portugueses: A Visão de Túndalo ou o Cavalleiro Tungullo”, *Revista Lusitana*, VIII, pp. 239-262.
- Osório, Paulo. (2004). *Contributos para uma caracterização sintáctico-semântica do português arcaico médio*. Covilhã: Universidade da Beira Interior.
- (2008). “Linguística histórica e história da língua. Aportações teóricas e metodológicas”, *1º Simpósio Mundial de Estudos da Língua Portuguesa*. São Paulo: Universidade de São Paulo, 1 a 5 de setembro de 2008.
- Said Ali, Manuel. (1964). *Gramática Histórica da Língua Portuguesa*. São Paulo: Melhoramentos.

Sampson, Rodney. (1999). *Nasal Vowel Evolution in Romance*. Oxford / NY: Oxford University Press.

Teyssier, Paul. (1980). *Histoire de la langue portugaise*. Trad. Port. de Celso Cunha (1982). *História da Língua Portuguesa*. Lisboa: Sá da Costa.

Williams, Edwin B. (1938). *From Latin to Portuguese. Historical Phonology and Morfology of the Portuguese Language*. Trad. Port. de Antônio Houaiss (4^a. ed., 1986). *Do latim ao português. Fonologia e morfologia históricas da língua portuguesa*. Rio de Janeiro: Tempo Brasileiro.

水沼修 (2006) 「ポルトガル語の複合時制の発展について－13 世紀, 14 世紀, 15 世紀のテキストから－」, 東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文.

— (2018) 「*Horto do Esposo*のポルトガル語について－動詞の変化形に関する一考察－」, 『*Anais*』, XLVII, pp. 47-61, 日本ポルトガル・ブラジル学会.

— (2024) 「中世ポルトガル語テキスト*Horto do Esposo*における接語代名詞の位置について」, 『ロマンス語研究』, 57, pp. 95-103, 日本ロマンス語学会.

(最終原稿受理日 2025 年 6 月 18 日)

(みずぬま おさむ / 東京外国語大学)